

長野県の植物覚書

今井建樹

Kenju Imai: New and noteworthy plants in Nagano Prefecture

長野県の植物について、気付いたことを本年もここに挙げて記録にとどめたい。関係識者のご叱正を願うものである。

1. ノハナショウブ *Iris ensata* Thunb. var. *spontanea* (Makino) Nakai の変異花

アヤメ属は外花被片3、内花被片3、雄蕊3、花柱の上部は3分枝になっていて、普通3数性である。ノハナショウブも当然3数性である。ところが数年前、岡谷市塩嶺(標高1100m)で変異花を発見し、移植して観察を続けた。その結果毎年変異花が咲き続け固定している

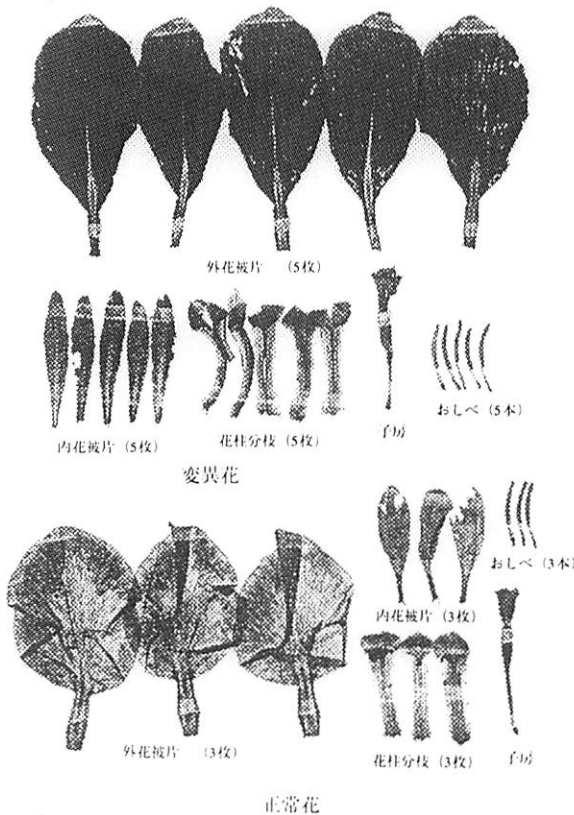


図1. ノハナショウブの花

表1 ノハナショウブの各器官の数

花記号	A	A	B	B	C	D	E	F	F
外花被片数	5	5	5	6	5	5	7	5	5
内花被片数	5	5	4	6	4	4	3	5	4
花柱分枝数	5	5	6	6	5	5	6	6	6
雄蕊数	4	5	5	6	5	5	6	5	5

花の同一記号は同じ茎についた花のもの

事が分かったので報告する。

表1のように各器官が4～7数となっている。そして同一花であっても必ずしも各器官が4とか5とゆうように一定した数ではない。また同一の茎についた花もその数は一定ではなく花ごとに異なる。この株には正常花は見られなかった。なおこの花はすべて不稔であった。こうした変異花を見るのは初めてである。

図1は5数性のもので、正常花は別株のものである。正常花に比べ異常花の各器官は長さはほぼ同じであるが幅が狭くなっていることがわかる。

2. スミレの雑種について

スミレは自然状態でも非常に多くの雑種が報告されている。特に諏訪地方で発見されたスミレの雑種は非常に多い。諏訪地方はスミレの宝庫と言われるほど多くの種類が見られ、またこれらが混生していることも原因していると考えられる。それに加えてスミレの熱心な研究家が何人か地元にあたためたためである。

1981年の諏訪の自然誌植物編には雑種が36種類が記載されている。今回長野県植物誌を作成するに当たって調査した結果、その後も発見があい次ぎ、諏訪地方に更に13種類が加わることとなった。そこで次に簡単にこれを報告する。これによって諏訪地域では合計49種類とり、県下では合計55種類の雑種が記載

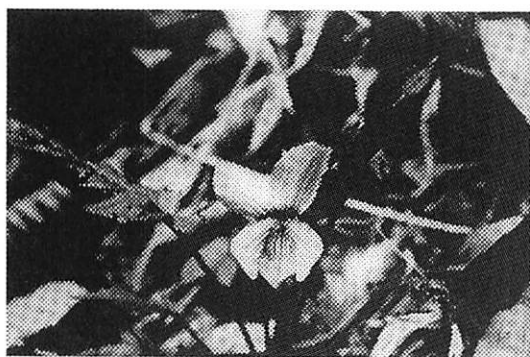


図2. フギレサクラミ 1996.5.3写

されることになった。したがって諏訪で見られない雑種は6種だけとなる。諏訪地方にはオオタチツボスミレが見られないのでこれとタチツボスミレの雑種ムラカミタチツボスミレ・ニオイタチツボスミレとの雑種ニオイオオタチツボスミレの2種類。フモトスミレ×マキノスミレのミツモリスミレ・マルバスミレ×マキノスミレのオノスミレ・スミレ×マキノスミレのナギソスミレ・フモトスミレ×エイザンスミレのスルガキクバスミレの4種類である。これらは今後の調査によって諏訪地方でも発見される可能性はある。

(1)ウンゼンスミレ(アカネスミレ×フィリシハイスミレ) 1991年5月15日 発見地・下諏訪町 発見者(伊東昭介)

(2)アカネノジスミレ(ノジスミレ×アカネスミレ) 1986年5月12日 諏訪市(伊東昭介)

(3)マルバアカネスミレ(アカネスミレ×マルバスミレ) 1991年5月15日 茅野市(伊東昭介)

(4)サクラヒカゲスミレ(サクラスミレ×ヒカゲスミレ) 1982年5月1日 下諏訪町(伊東昭介)

(5)フィリフモトシハイスミレ(フィリフモトスミレ×フィリシハイスミレ) 1981年9月13日 下諏訪町(伊東昭介)

(6)マキノヒナスミレ(マキノスミレ×ヒナスミレ) 1982年5月10日 下諏訪町(伊東昭介)

(7)フィリマルバヒナスミレ(フィリヒナス

ミレ×マルバスミレ) 1983年5月3日 下諏訪町(伊東昭介)

(8)マルバサクラスミレ(マルバスミレ×サクラスミレ) 1994年5月6日 下諏訪町(伊東昭介)

(9)フギレサクラスミレ(エイザンスミレ×サクラスミレ) 1996年5月8日 下諏訪町(伊東昭介・今井建樹)

本種は1977年5月25日に岩田勝之助が野辺山で最初に発見し、浜栄助もそこで確認し葉1枚だけの標本が残されている。しかしここでは絶滅したとされていた。ところが上記のように二人で野山を歩いていて偶然にこれを発見した。濃紫紅色で紫条のあるサクラスミレより大形の径約3cmの美しい花を付けていた(図2)。

(10)ミハシスミレ(ノジスミレ×コスミレ) 1992年5月10日 岡谷市(今井建樹)

(11)キクバワカミヤスミレ(マルバスミレ×ヒゴスミレ) 1963年4月28日 富士見町(浜栄助)

(12)ヤシュウスミレ(フモトスミレ×サクラスミレ) 1980年6月8日 下諏訪町(伊東昭介)

(13)フィリヤシュウスミレ(フィリフモトスミレ×サクラスミレ) 1981年5月31日 下諏訪町(伊東昭介)

以上の記録は諏訪地方をもとにしたものである。日本最初の発見のものもあるが、既に他で発見されているが、諏訪地方で最初に発見された年代・発見地・発見者の記録である。

3. ハケ岳のチシマギキョウ

8月の上旬にハケ岳に登ると高山帯の岩場には沢山のチシマギキョウを見ることができ。ところがこの花は何時見ても花冠の先が開ききらずにつぼまった状態のものが多い。最初のうちは花が咲ききっていないのか、または光の関係かと思っていた。ところが他の山に登って比較して見るとどうもはっきりと違うと思うようになってきた。現地で花の咲いている状態で比較すると外観上の相違点は花

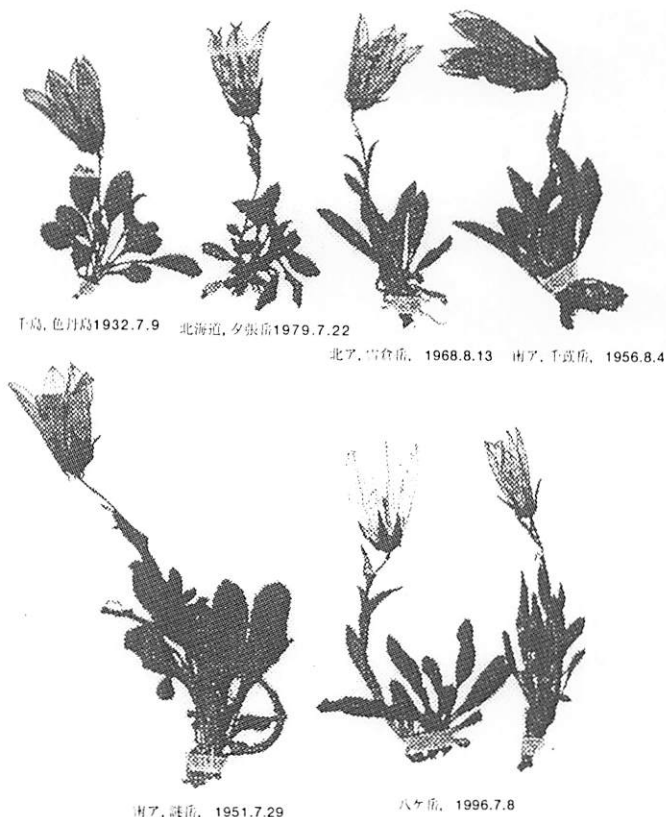


図3. 各地のチシマギキョウ

冠裂片が開いてやや後ろに反り返っているのが普通である。ところが八ヶ岳のものは裂片が2つ折りにたたまれた状態になったままで、よく開いたものでも花冠の太さ以上にはほとんど開かない。時には裂片の先が開かず着いた状態で先が尖ったようになっている。こうした状態のものは他の山では見たことがない。そのため花冠が他の山のものより長い様に見える。また花の大きく開いた他の山のチシマギキョウを植物に詳しい八ヶ岳の山小屋の人に見せたところこれはチシマギキョウではなくイワギキョウでは無いかとの返事が帰ってきた。

そこで信州大学の標本を借用して各地の形態を比べて見た(図3参照)。標本数が少ないため測定値による比較はできなかった。結果としていえることは、

(1)花冠の大きさはほぼ等しいといえる。

(2)花冠裂片は標本として押しつぶされるために特に大きな差異は認められないが、八ヶ岳の裂片は外むきにならずやや内側に向いている。

(3)全体に南にいくに従い次第に大形になっていくことが分かる。葉の形は千島の色丹島のものは楕円形で小さいが、南にくると次第に披針形となり北ア・八ヶ岳のものは細長く大きくなっている。南アになると再び楕円形に近くなり更に大形になっていく事が分かった。

以上から八ヶ岳のものを花の開く状態からだけ見ると品種としてヤツガタケチシマギキョウとして扱ってもよいようにも思う。どうしてか八ヶ岳だけにはイワギキョウの分布が見られない。これがチシマギキョウの形態に関係するかどうか疑問として残る。